

よりよい生徒指導に向けて

第Ⅱ章 場面指導事例【授業編】

山口県教育委員会

第Ⅱ章 場面指導事例 【授業編】

I 児童生徒のよさを生かす授業づくり

- 1 授業の中で行う生徒指導 1
- 2 児童生徒のよさを生かす授業づくりの視点 1
- 3 授業づくりを支える学級づくり 2
 - 「児童生徒のよさを生かす授業づくり」概念構成図 4

II 義務教育編

- 1 児童が授業に集中できるようにする（小学校・低学年） 5
- 2 忘れ物を無くし宿題に取り組めるようにする（小学校・中学年） 6
- 3 話し合い活動を活性化する（小学校・高学年） 7
- 4 授業規律の定着を図る（中学校） 8
- 5 特別教室で落ち着いた授業をする（中学校） 9
- 6 グループ活動を意欲的な学び合いに高める（中学校） 10

III 高等学校教育編

- 1 韻文の学習発表活動で生徒を生かす（高等学校・国語） 11
- 2 すべての生徒の発言を生かす理科実験（高等学校・生物） 12
- 3 個性を尊重しながら共同作品を制作する（高等学校・芸術） 13
- 4 表現活動で生徒を生かす（高等学校・外国語） 14
- 5 みんなで考えよう情報モラル（高等学校・情報） 15
- 6 主体的に主題に取り組む（高等学校・工業） 16

IV 特別支援教育編

- 1 個に応じた計算（小学校・低学年） 17
- 2 音読が上達するための工夫（小学校・中学年） 18
- 3 授業への取りかかりをよくするための工夫（中学校） 19
- 4 LDの児童生徒への指導上の配慮 20
- 5 ADHDの児童生徒への指導上の配慮 21
- 6 高機能自閉症の児童生徒への指導上の配慮 22

I 児童生徒のよさを生かす授業づくり

1 授業の中で行う生徒指導

学校教育の中で児童生徒を育てる教員の役割には、大別すると学習指導と生徒指導がある。学習指導と生徒指導は、車の両輪に例えられるようにいずれも必要不可欠であるとともに、相互補完的にその効果が期待されている。例えば、学習指導において生徒指導は、児童生徒の学習準備状態の形成において必要であるが、同時に、児童生徒の学業不振が生徒指導上の問題の誘因や遠因になることも多く、生徒指導においても学習指導の重要性を痛感することが多い。そこで、授業を構想し展開するに当たっては、まず、児童生徒が落ち着いて学習に取り組むために学習規律の定着に向けた指導が必要である。さらに、積極的な生徒指導の立場から次の点に留意し、児童生徒の違いを認め個性や可能性を引き出す授業づくりをめざす必要がある。

- * 児童生徒は、「わかる授業」を求めている。したがって、学習課題や学習活動を工夫することで、「なぜだろう」「こんな時はどうなるのだろう」といった新たな興味・関心を広げる発問を工夫したり、「わかった」「できるようになった」といった達成感をもたせたりする授業づくりをする。
- * 児童生徒は、授業の中で他者から認められることを求めている。したがって、児童生徒の意欲的な学習活動を教師が評価し、「〇〇さんの方法で確かめてみよう」「〇〇さんが発見したことは、△△の原理といいます」など、個々の活動を授業の展開や教科の本質の中に位置付けたり、「〇〇さんの意見でよく分かるようになった」など、お互いに認め合う相互評価を行う活動を仕組んだりすることによって、一人ひとりに自己肯定感をもたせるような授業づくりをする。
- * 児童生徒には、仲間と過ごしたいという帰属の欲求がある。したがって、児童生徒一人ひとりに役割があったり、協同的な学習活動によって、友達のよさを感じ取れたりする授業づくりをする。

2 児童生徒のよさを生かす授業づくりの視点

(1) 適切なねらいの設定

授業を構想し展開するに当たっては、適切なねらいを設定する必要がある。各教科の指導計画に位置付けられた単元目標や授業における主眼などがそれに当たる。ねらいを設定する場合には、教科の目標や指導計画はもちろんのこと、学級や児童生徒一人ひとりの学習状況等を十分に踏まえ、「どのような活動を通して、何を身に付けさせたいのか」を明確にする必要がある。また、観点別に行う評価の規準との関連も踏まえて、知識や技能の習得のみならず、学習課題解決の過程での見方・考え方や関心・意欲・態度についても目標を明らかにする必要がある。

(2) 児童生徒が自ら解決したくなる学習課題の設定

児童生徒は、日々の生活や特に実際の体験活動の中で様々なことに疑問をもったり、授業の中で既習内容に理解不十分である箇所があることを感じたりしている。児童生徒が解決したくなるような学習課題の設定においては、こうした児童生徒が

抱く関心を大切にして必然性や必要性を演出する必要がある。

また、課題の解決においては、学習状況等に応じて個別に支援を行うことによって、課題に対する児童生徒の関心・意欲を大切にする必要がある。個別の支援を助ける教具や教材を工夫して準備することも学習課題の設定においては重要である。その他にも、児童生徒のよさを生かす授業には、次のような学習課題の設定が期待される。

- ア 児童生徒の生活や体験、知識によって問題場面がイメージしやすい課題
- イ 解決に向けて、多様なアプローチが可能である課題
- ウ 試行錯誤を繰り返しながら意欲的に学習を継続できる課題
- エ 課題解決が新たな課題を生む可能性を秘めた課題
- オ 自らの意見を明確にすることのできる課題
- カ 学習に対立や分化が起こり、児童生徒の学習意欲をかきたてる課題

(3) 課題解決のために有効で魅力ある学習活動の設定

学習活動の設定においては、グループ活動などの協同的な活動や活発に表現し合う活動を意図的に仕組むことで、児童生徒の参加意欲を高める必要がある。また、児童生徒の発達段階や学習課題によっては、実験方法や作業手順といった学習活動を児童生徒一人ひとり又はグループごとに選択可能にすることも考えられる。

その他にも、児童生徒のよさを生かす授業における学習活動では、次のような点に留意する必要がある。

- ア 課題を解決する過程において必要な基礎的・基本的事項を明確にする。
- イ 個別に学習する時間を保障し、一人ひとりに寄り添った支援を行う。
- ウ 必要に応じて、考えを確かめたり、ヒントを獲得したりする活動を保障する。
- エ 板書内容など学習の要点をノートに写したりまとめたりする時間を保障する。
- オ 解決方法や解決結果をお互いに比較検討するなど学び合う学習活動を仕組む。
- カ 特別に支援が必要な児童生徒に対しては、操作活動が可能な教具を準備したり、個別にもう一度発問したり、大きい文字で板書したりするなど配慮をする。

(4) 次の授業へつなげるための授業成果の確認

授業の中で獲得した知識・技能や友達とのかかわりによって得られたことを確認するために、学習を振り返る（自己評価）活動を仕組むことが必要である。 新たな課題を確認したり、集団による学びのよさや可能性を感じ取ったりすることで、次時への期待感を増幅させることがねらいである。

3 授業づくりを支える学級づくり

(1) 学級担任と教科担任の連携

学級を学習集団とする授業では、学級の雰囲気や学習効果に大きく影響する。したがって、学級担任は担任する学級を落ち着いて学び合うことができる集団に高める努力をする必要がある。また、学級づくりは、学級担任だけの仕事ではなく、各教科担任も授業において学級づくりの視点を忘れることなく指導にあたる必要がある。特に、小学校における専科や教科担任制である中学校・高等学校での教科の授

業では、学級担任との情報交換に心がけ、学級担任の行う学級づくりを理解した上、次のような点で担任と協力して生徒指導を行う必要がある。

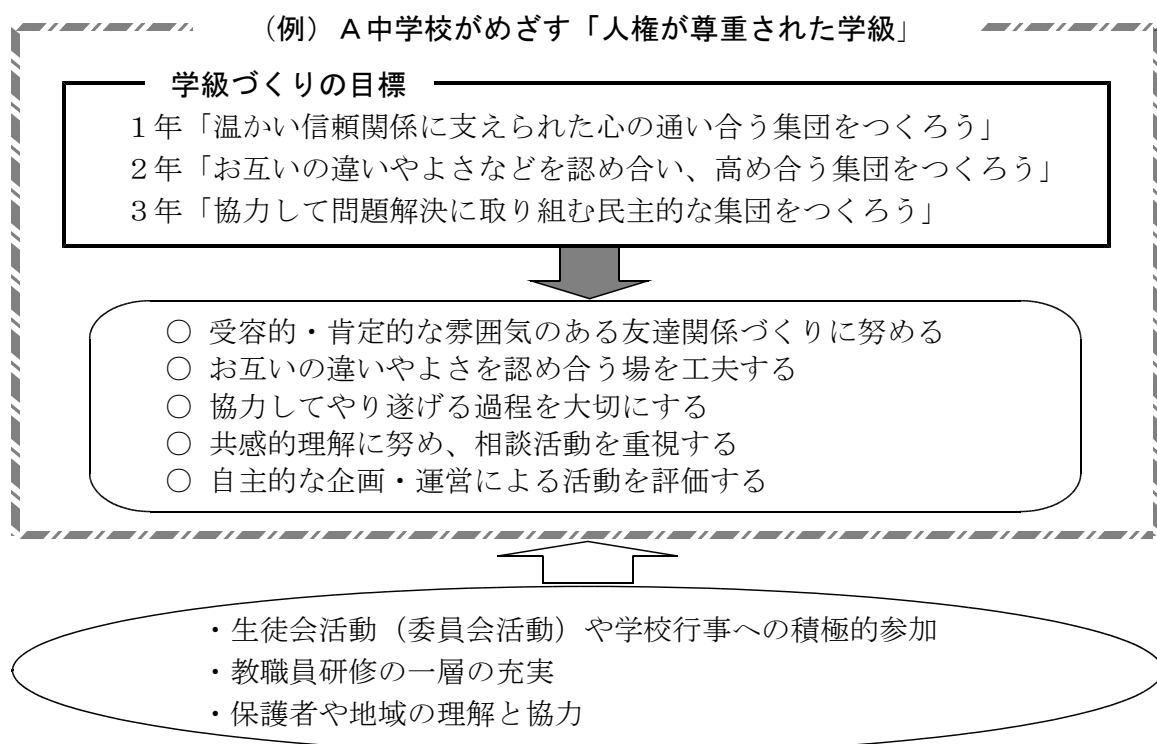
- ア 受容的な人間関係づくりのために、一人ひとりのよさを発見できる活動を仕組んだり、互いに協力し合う態度を肯定的に評価したりする。
- イ 学習規律・態度の育成のために、準備物や服装などや学習態度について学級担任も把握できるようにする。
- ウ 学習習慣の定着のために、計画的に宿題を出して、その提出や取組の状況について把握し評価するとともに、その状況を定期的に学級担任にも伝える。
- エ 自己存在感の醸成のために、自らの意見を表出する活動や相互評価し合う活動から自己肯定感・有用感を得る体験を仕組む。

(2) 人権尊重を基盤とした学級づくり

一人ひとりがお互いを認め合い、自己の可能性を発揮しながら、自己実現を図っていくためには、友達同士や子どもと教師の間に信頼と共感に基づく温かい人間関係を築き、一人ひとりが大切にされていると実感できることが大切である。

また、所属する集団や友達とのかかわりの中で、様々な体験や活動を通して、人権を尊重していくことが必要であり、一人ひとりの違いを認め合い、それぞれのよさを学び合うなど、人権尊重を基盤とした学級づくりが重要となる。

一人ひとりの児童生徒を生かす授業を構想し展開するためには、落ち着いた学習環境の整備が大切となる。その中でも安心して楽しく学べる雰囲気は、児童生徒が最も望む環境の一つである。また、教師の何気ない言動により、児童生徒の人権が侵害されることのないよう、平素から教師自らが、豊かな人権感覚を磨いていく必要がある。



児童生徒のよさを生かす授業づくり

適切な
ねらいの設定

一人ひとりの心身及び学習状況等を十分に踏まえた上で、魅力のある教材や協同的な学習活動・内容を明確にする。

導入

児童生徒が自ら解決したくなる学習課題を設定する。



- ① 日常生活や既習の内容から疑問などを引き出す。
- ② 児童生徒の個性を生かせる課題を設定し、参加意欲を高める。
- ③ 学習状況等に応じて個別に支援を行うための準備をする。

展開

課題解決のために **有効で魅力ある学習活動**を設定する。



- ① 一人又はグループごとに工夫した解決方法を促し、一人ひとりに寄り添った支援を行う。
- ② 課題別、方法別のグループ活動では、物的・時間的な保障や個の役割等を明確にし、自己決定の機会を設定する。
- ③ 受容的に話し合い、互いに学び合うことができるようにする。



終末

授業成果の確認をして、学習のまとめをする。

- ① 学習を振り返り、友達とのかかわりによって成果が得られたことを感じ取らせる。
- ② 次の時間の課題や活動の楽しさ・よさを感じ取らせる。



授業を通した学級づくり

～人権尊重を基盤とした学級づくり～

受容的な人間関係づくり

- 一人ひとりの違いを認め合う関係
- 一人ひとりのよさの発見
- 互いに協力し合う態度

学習習慣の定着

- 提出物への温かい評価
- 家庭学習と授業のつながり

学習規律・態度の育成

- 準備物・服装の確認
- 学習規律の確立

自己存在感の醸成

- 自己決定する場
- 自己肯定感・有用感

児童が授業に集中できるようにする（小学校・低学年）

場 面

入学して間もない小学校1年生の担任をしているのですが、授業中に立ち歩いたり、授業とは関係ない話を始めたり、周りの児童にちょっかいを出したりするなど、児童たちが授業に集中できない現状があります。授業中に落ち着かせようと何度も注意するのですが、その時は素直にきくものの、長続きしません。

手だて

まず、児童のこのような言動を、学校生活や友達への期待や関心の表れと受け止め、それをよりよい方向へ伸ばすという立場で、指導に当たしましょう。

授業中の一つひとつの学習活動を、児童が集中できる5分～15分程度で仕組み、内容に応じて、徐々に長くしていくように工夫することが大切です。

また、座って学習する活動と、体を動かして活動する学習の双方を取り入れ、授業にメリハリを付けることも、集中力を高める上で有効です。

児童たちがやってみたいことや考えてみたいことを出し合う活動を充実させ、教師や友達同士で受け止め合いながら、一人ひとりの児童が活動のめあてや具体的な活動の仕方を、しっかり理解できるようにしましょう。

また、できたことをしっかり認め、よい点を十分ほめることは、児童との信頼関係を築くとともに、児童のやる気を促す上で大変効果的です。特に、低学年には教師からの直接的な声かけ等が、児童の情緒の安定ややる気を醸成することから、きめ細かな評価や働きかけが欠かせません。

焦らず、児童のできることを一つずつ増やしていく心構えが大切です。

例えば 授業を振り返って、「みんながとても集中して授業に取り組めた」ことなどを確認し合って、頑張ったこととして画用紙でつくった短冊に書き、日付を書き入れて教室に掲示します。クラスとしての成長を年表のように掲示していくことで、児童一人ひとりに達成感や目標意識をもたせましょう。

指導上の留意点

- 教師と児童、児童同士の受容的な態度や支持的な風土を醸成し、みんなで一緒に学習することのよさの理解や実感を深める。
- 児童のよい点を中心に、家庭との連絡を密にし、学校、家庭の双方がほめることによって児童のやる気を伸ばす。
- 特別な支援を要する児童については、複数の教師でその児童の言動を把握したり、適切な対応のために諸機関との連携を図ったりする。
- 入学後の児童の学校生活への円滑な適応のために、年間計画に即して幼稚園や保育園と相互に授業参観をしたり、連絡協議会を行ったりする。

忘れ物を無くし宿題に取り組めるようにする（小学校・中学年）

場 面

ノートや教科書の他、学習に必要なものを忘れることが多く、注意してもなかなか改善がみられない児童がいます。宿題忘れもあり、授業にも集中できない状態です。

手だて

前もって学習のねらいや活動の内容を知らせ、是非やってみたいという気持ちを高めることが大切です。

連絡帳に翌日の日課や持参物を書く時間をしっかり確保し、忘れ物の多い児童については、正しく書いているかを確認するとよいでしょう。特に、日ごろ持参物については、期間に余裕があるうちに前もって知らせ、持ってくるまで繰り返し声をかけるなどして、「私も忘れずに持参できた」という成功体験を積み重ねることも大切です。

例えば 忘れ物を一つもしなかった日の連絡帳に、花丸を付けたり、讚美の温かい言葉を記入したりするなどして、自覚できたことを喜びに変えてあげましょう。

また、忘れ物をしたときに、連絡帳にきちんと書けていたか、いつ、どこで持参物を準備したらよかったのかなどについて確認し、適切なアドバイスをすることが必要です。その際、「忘れ物の多い困った子」としてではなく、一緒に原因を考え、解決していこうという姿勢を示しましょう。

宿題忘れの多い児童についても同様に確認し、声をかけていくことが大切ですが、学習内容が十分に理解できていない可能性も少なくありません。個別に指導したり、宿題の量を調節したりするなどの配慮が必要な場合もあるでしょう。

例えば 算数の宿題で、10問の計算問題のうち2問だけしかやってこなかった児童にも、その2問への取組を評価し、正解であるなら発表する機会をつくってあげましょう。残りの8問はその後1日1～2問ずつ宿題にしたり、個別に指導したりしましょう。

指導上の留意点

- 全校で基本的な生活習慣を育む計画を立て、その中に学習の準備に関する内容を位置付ける。
- 学級活動や道徳の時間などに、計画的な生活の仕方などについて、総合的に指導を継続する。
- 学級・個人懇談、学年・学級通信等で保護者の理解を求め、協力を得る。
- 必要に応じて、保護者に個別に連絡し、準備物等についての十分な理解や協力を求める。

話し合い活動を活性化する（小学校・高学年）

場 面

高学年を担当しているのですが、みんなの前で自分の意見を言うことに抵抗があったり、友達の発表を受けて発言できなかつたりする児童が多いようです。授業の中で、児童一人ひとりが自らの考えを深めたり広めたりするために、話し合い活動を活性化したいのですが、なかなかうまくいきません。

手だて

一人ひとりの思いや願いを引き出し、学習に関する問題意識や課題を強く実感させるため、導入を工夫することが大切です。

全体の話し合い活動の前に、一人ひとりが自分の考えを書いてまとめる時間を確保したり、グループで考える活動を設定したりしましょう。話し合い活動では、友達の意見を受容的な態度で、また、自分の意見と比較しながら聞くことへの指導が必要です。

出された意見に小見出しや番号を付けたりしながら、意見を分類するなどの板書の工夫をしましょう。

友達の発表に対して自分の意見を明確にすることを指導したり、話し合いの視点を与えたりすることが必要です。

よりよい話し合い活動を賞賛する教師による評価活動や、自分たちの話し合い活動を自己評価や相互評価する活動を仕組むことが有効です。

例えば 機会があるごとに、児童の話し合い活動をビデオに記録しておきましょう。国語の時間などを利用して、よい話し合い活動のモデルをビデオで視聴して自分たちの話し合い活動に欠けていたルールやマナー、あるいは、取り入れたい方法等を見付ける授業を実施しましょう。

指導上の留意点

- 全校体制で、朝の会等を活用して、互いの意見を交換する活動を継続的に実施する。
- 特別活動、総合的な学習の時間など、子どもたちが主体的に互いの意見を積み重ね、協力して実施することができるような体験活動等を充実する。
- 参観日等で保護者に児童の交流の場を見せたり、学級通信等で子どもの成長を伝えたりして、学校での話し合い活動への取組についての理解を得る。
- 人間関係づくりを促進する教育的手法（PAや構成的グループエンカウンターなど）を活用して、全校体制で、計画的に人間関係をつくるための実践を行う。

授業規律の定着を図る（中学校）

場 面

1年生の担当になりました。先輩教師から「最初の指導が大切。とにかく生徒にはできるだけ厳しくすればいい。」とアドバイスを受けました。確かにそういう一面もあると思いましたが、中1ギャップの問題も気になり、結局、効果的な指導ができないまま学習規律も定着していません。

手だて

学習規律には、チャイム着席や授業前の黙想など、学校全体、学年単位で設定して指導する規律と、ノートの使い方や体育の授業での服装など、教科独自に設定して指導する規律があります。また、安全上必ずすべての生徒に守らせるよう指導を徹底すべき規律もありますが、目標として掲げ状況に応じて個別に指導すべき規律もあります。大切なことは、生徒が学習規律の意義を理解することです。また、規律の内容によって生徒自らが工夫できる余地を残すことは、生徒の自尊心を大切にすることにつながり、規律の定着に有効な手だてと言えるでしょう。

生徒との信頼関係構築のためにも、「規律は守って当たり前」ではなく、規律を守って活動する生徒に対して、肯定的に評価することが大切です。逆に、規律が守れない生徒への対応は、焦らずにその生徒のできることを一つずつ増やしていくなどの関わりをもち続け、信頼関係を築くことが大切です。

例えば 学級活動の時間に、授業の受け方を考えることをテーマにして、日頃の授業を振り返り、授業に必要なルールづくりをする方法があります。活発な話し合い活動にするために、事前アンケートやグループ別討議を用いたり、ディベートを行ったりすることも効果的です。改善に向けた具体的な目標まで立てられるとよいでしょう。

指導上の留意点

- 学校や学年単位で教科の枠を越えた学習に関する共通のルールや約束事を決め、生徒に説明するとともに、どの教科でも同じ対応ができるように共通理解を図る。
- 教科独自のルールや約束事は、年度当初の授業開き等で説明して、その内容と必要性を周知徹底する。
- 放課後の時間を利用して学習の補充や未提出の課題に取り組ませる場合、「補習は〇時〇分まで」「大会前は部活動が優先」「必要な場合は事前に保護者へ連絡する」など、学校のルールとしてあらかじめ優先順位や対応の方法などを決めておく。
- 授業規律が守れない生徒に対して、厳しくしかってやらせるだけでなく、その理由や原因について受容的な態度で解明し、その生徒の実態に応じた対応策を工夫する。その際、場合によっては、カウンセラー等を含めたチームで対応していく。

特別教室で落ち着いた授業をする（中学校）

場 面

特別教室で実施される授業において、多くの生徒は、教室が変わることで気持ちが切り替わり、普通教室で実施される授業以上に心構えや意欲をもつことができるようです。しかし、一方で普段と異なる環境のため、集中できない生徒もいて、なかなか落ち着いた授業になりません。

手だて

特別教室には、生徒の興味をひく道具や掲示物などがあつたり、普通教室と机やいすが違っていたりすることから、生徒が落ち着かないことがあります。また、教室移動が必要であるため、授業開始時刻に遅れて入室したり、ノートや用具など学習に必要なものを普通教室に忘れて授業中に取りに戻ったりする生徒もいます。こうした状況を打開するためには、各教科担任が特別教室の利用について、統一したルールを明確に示すことが大切です。

例えば 次のような点に留意したルールをつくりましょう。

- ① 教具や教材備品の使用は、教師の指示を待って行うことを徹底する。
- ② 座席表や班編成表などにより、特別教室での座席を明確にして、担任と共有する。
- ③ 素早い教室の移動と、チャイム着席を実践させ、必ず出席の確認を行う。
- ④ 忘れ物をする生徒に備え、予備の用具や準備物を必要に応じて貸し出せるように準備して、授業中に普通教室へ帰らなくて済むようにする。
- ⑤ 授業終了の時刻まで特別教室に留まることで、普通教室の授業の妨げにならないようにする。

また、学習内容に関連した掲示物や教具の準備を工夫することによって授業の演出を心がけるなど、特別教室ならではの利便性を生かして、生徒の学習意欲を喚起することも大切です。

指導上の留意点

- 統一したルールやその指導の方法について、特別教室を利用する教科担任で話し合いをする必要がある。
- 全教員の共通理解によって、授業終了時刻の厳守や移動中の生徒への指導などを心がけることにより、教室移動を迅速で確実なものにする。
- 特別教室の授業に集中して取り組めない生徒に対しては、厳しくしかるだけではなく、なぜ集中できないのか、その理由や原因について受容的な態度で解明し、その生徒の実態に応じた対応策を工夫する必要がある。
- 授業内容によっては普通教室で実施した方が学習効果が上がる場合もある。「理科は理科室で」という固定観念にとらわれず、特別教室を利用する必然性を再考する必要がある。

グループ活動を意欲的な学び合いに高める（中学校）

場 面

授業の中で、一斉指導の形態だけでなくグループ活動を仕組みたいのですが、机を合わせただけで、私語が始まり教室全体が落ち着きません。また、グループ内の一部の生徒ばかりが活動し、その他の生徒は活動に参加していません。

手だて

一斉指導の形態で進めていた学習活動をそのままグループ活動で取り組んでも学習効果は上がらないことが多いようです。まず大切なことは、グループ活動の必要性がある学習場面において、活動の内容や目標を明らかにしてからグループ活動を設定することです。

また、生徒一人ひとりが課題に対する自らの考えをもってグループ活動に臨めるように、発問や学習展開を工夫することが大切です。

グループ編成においては、学級の生活班等の既成のものにとらわれず、学習課題によって男女比や人数など編成条件を柔軟に変えることも必要です。

取組が順調なグループの活動を観察する活動から、よりよい活動のための方法やグループ活動の楽しさを学び取る体験も大切です。また、活動が停滞ぎみなグループには、教師が活動に加わって手本を見せることも考えられます。

グループ活動においても、教師が評価者として機能する必要があります。

例えば グループ活動を展開しているとき、教師はその活動に積極的にかかわることが大切です。話し合い活動では教師自ら司会者として参加して生徒が話し出すきっかけを作りましょう。また、グループごとの活動内容に対して、大きな声で「これすごい。他のグループは気付いていないよ。」など、賞賛の言葉がけによる評価活動をしましょう。評価されたグループのみならず他のグループにも「私たちが負けずに頑張ろう」といったよい刺激となり、活動がより活発化します。

指導上の留意点

- それぞれのクラスの実態を把握し、時間設定などそのクラスの学習状況に合った方法を考える。
- 普通教室でグループ活動をする際、机を隙間なくきちんと合わせるために机の周りのカバン等を所定の場所に置かせるなど、学習環境にも気を配る。
- 「良い聞き手が、良い話し手を育てる。」という観点から、聞く姿勢やメモの取り方など、普段から聞く力を育てることで円滑なグループ活動が実現する。
- 担任や他教科の教員と協力して、より学習効果の上がるグループ活動の進め方について研修する。

韻文の学習発表活動で生徒を生かす（高等学校・国語）

場 面

高等学校第1学年の国語総合の時間に、詩歌に関する調べ学習をグループで行い、その成果の発表会を行おうと思います。韻文の読解力、鑑賞力を向上させるとともに、互いに認め合い、協力することの重要性を生徒一人ひとりに気付かせるための活動として、どのような取組が有効なのでしょうか。

手だて

「アンソロジーの作成」という単元を設定してみてもどうでしょうか。指導に当たっては、単元のねらい、取組方法等について十分に説明することが大切です。

（アンソロジー：ある基準によりまとめた作品集）

まず、各自で詩集、句集等を持ち寄り、一人ひとりが設定した愛、友情などのテーマに基づいた詩や短歌、俳句を数編選択します。その際、グループ内で情報交換を行ったり、テーマを表現した詩歌を作成したりするなど、教員は生徒が主体的に活動できるよう支援します。

続いて、選択した詩歌、及び自作の詩等を各自が用紙にまとめます。その際には、発表用として見て分かりやすいレイアウトとなるように支援します。

さらに、発表原稿を作り、グループ内で発表を行います。その際、「分かりやすさ」「声の大きさ」「表情」などの相互評価を行います。評価結果を踏まえ、グループ内の話し合いにより発表者を決めるようにすると、受容的な人間関係をつくる上で効果的です。

代表者による発表会は、外部の人にも公開すると一層張り合いが出るでしょう。

指導上の留意点

- グループ分けにおいては、リーダーシップを発揮できる者を置くなど、円滑に活動できるよう配慮する。
- グループでの情報交換では、できるだけ多くの生徒と資料を交換し合い、テーマに沿ったものを集めるように指導する。
- グループ発表では、他の国語の教員にも参加を依頼し、発表する態度や聞く姿勢などについて、なるべく多くの教員の評価が得られるよう配慮する。
- 発表者の決定については、各班における選出の根拠が明確に示されるようにするとともに、評価票などにより、適正に行われたことを確認する。

すべての生徒の発言を生かす理科実験（高等学校・生物）

場 面

「生物Ⅰ」の授業において、「体細胞分裂の観察」及び「核分裂の各時期の相対的な長さを考察」する観察、実験を行うことにしました。できるだけ多くの生徒の発言を引き出す工夫を行い、一人ひとりが積極的に観察、実験にかかわるための工夫として、どのようなことに注意すればよいでしょうか。

手だて

体細胞分裂の観察は、基本的には生徒一人ひとりが顕微鏡を使って行う活動ですが、核分裂の各時期のうち、どれが長くかかるかを限られた時間で考察する観察、実験においては、各生徒の観察結果をクラス全体でまとめることにより効果的に進めることができます。

その際、次に示すように、実験手順の説明から考察までの各段階で、班別活動や生徒の発言の場を多く設けることにより、生徒全員の発言を引き出し、一人ひとりの積極的な参加を促すと一層効果的です。

- ① 実験手順の説明：生徒が理解しやすいよう図示し、発問を加えながら手順を説明する。
- ② 実験操作：個々の生徒に応じた発問をするため、机間指導を行いながら各生徒の活動状況を細かく把握する。
- ③ データの集約と考察：観察した各分裂期の細胞数が各時期の時間に比例することに気付くよう、数値の確認をしながら、多くの生徒から発言を求め、班ごとの板書などをもとに、クラス全体での考察を行う。

指導上の留意点

- 班別活動として、各分裂時期を計数させ、板書によりクラス全体の集計をすることで、標本集団を大きくする。
- 実験結果の確認などを含め、全員に対して質問するなど、生徒の発言の場を用意しておく。
- 机間指導しながら、各生徒のノートや記録を細かく確認し、個々の生徒が答えやすい質問となるよう工夫する。
- ストレートな質問であれば、授業は円滑に進むが、期待するほどには生徒に定着しないこともある。「染色しないで細胞を観察すると、どのように見えるかな。」など、変化のある問い方を工夫し、通常の展開とは異なる質問を試みる。
- 生徒の幅広い発言に対して効果的な対応を行うために、まず担当教員の得意な分野から実施するとよい。
- 顕微鏡投影装置を使って各時期の分裂を確認し、すべての生徒が最終的に観察、実験の結果を共有できるようにする。

個性を尊重しながら共同作品を制作する（高等学校・芸術）

場 面

第1学年の書道の時間において、授業中に目立たないものの、まじめに取り組んでいる生徒に自信をもたせるため、その生徒の得意な分野である「創作」を取り上げ、グループによる共同作品の制作を企画したいと思います。各自の個性を生かしつつ、作品として調和の取れたものにしていくためには、互いの意見を理解し合うコミュニケーションや、相手の立場に立って考えることの重要性に気付かせ、皆が協力する姿勢を育むことが大切ですが、どのようなことに留意して取り組めばよいでしょうか。

手だて

音楽における合唱や演奏と異なり、書道や美術は個人作品の制作が中心で、共同制作の経験は少ないと思われます。従って、皆で協力して制作することの面白さ、楽しさ、難しさを説明し、共同制作の内容や方法をよく理解させることが大切です。

続いて、作品を書く前の準備として、「題材の選択・何を訴えるか・表現の方法・鑑賞者の心へ響くには」について、ワークシートを活用して計画を練るとよいでしょう。

各グループの人員構成は、教員があらかじめ示す一方で、イメージ構成図や誰がどこを書くかについては、自分たちで話し合っただけで決めさせると効果的です。

こうした支援によって、当該生徒は司会役を務め、自分の意見を述べるとともに、メンバーの構想に耳を傾けてくれるなどが期待されます。

指導上の留意点

- 山口県の生んだ歌人や詩人である種田山頭火・金子みすゞ・中原中也について調べ、作品を読んで共感したところを発表し合い、題材を絞り込んでいく。
- 相手の意見をよく聞き、どういう点を訴えていくのか、基本方針を話し合う。
(例 青春のやるせなさを表現する、優しさを訴えるなど)
- 漢字とかなをどのようにデフォルメ（変形）していくか、表現方法を工夫させる。
- 墨色、かすれ、筆の動き等、これまで会得した技術をみんなで話し合う。
- 平凡な作品にならないよう、教員が巡回しアドバイスする。
- 共同作品の展示、鑑賞によりお互いの制作の意図を共有し、理解を深める。

表現活動で生徒を生かす（高等学校・外国語）

場 面

高等学校第1学年におけるオーラル・コミュニケーションⅠの授業で、英語を話すことに苦手意識を感じている生徒の抵抗感を和らげるために、今までに読んで中で最も好きな本を、Show & Tell（実物を示しながらの紹介）の手法を用いてスピーチさせることにより、英語を話すことに自信をもたせたいと思います。どのようにすればよいでしょうか。

手だて

まず、生徒全員が自分の好きな本を1冊ずつ持参し、その本のどのような点を紹介するかについて考えます。

初めに、スピーチは導入・本論・結論から構成されることや、各論の全体の中の位置付け・内容について教員の説明を聞いた上で、各論で具体的に何を伝えるかについて、各自が考えます。

次に、上記の構成に従って、事前に配布したスピーチ原稿用紙（各論ごとの枠や例示のあるもの）を使用して原稿を作成します。その際、原稿用紙には話す内容すべてを記述するのではなく、要点のみを英語で記述するとよいでしょう。原稿作成が終了した後、隣同士で Show & Tell の手法を用い、本を紹介し合います。

続いて、クラスの数人が教員の指名により皆の前で発表します。その際、聞き手の生徒には、チェックシートを配布し、項目（「聞き取れたこと」「よかった点」「改善した方がよい点」の三つ）ごとの評価等を記入すると、聞き手の観点がはっきりして効果的です。

発表後、聞き手の生徒に、スピーチの内容について英語で質問してもらいます。

また、記入したチェックシートは授業後回収し、シート内の記入済みの3項目の部分を取り、聞き手の全員分を貼り合わせて、次の時間に発表した生徒に渡すと、振り返りや、他の生徒を評価する際の参考となります。

指導上の留意点

- 発表の際には、文法的な誤りを気にせずに、気持ちを楽にして自由に発表させる。
また、本の表紙や中の写真や絵等を見せる際には、みんなに十分見えるように注意させる。
- 相手に自分の言いたいことを伝えることが重要であることを理解させた上で、声の大きさ、話すスピード、アイコンタクトや間の取り方、顔の表情についても留意させる。
- 発表者のスピーチが終わったら、全員で大きな拍手を送り敬意を表させる。
- チェックシートには、率直な意見・感想を日本語で具体的に記述させる。
- チェックシートに記述された意見・感想にみられる共通の指摘事項や教員が気付いた共通の問題点等については、後日の授業で適宜紹介する。

みんなで考えよう情報モラル(高等学校・情報)

場 面

ICT(情報通信技術)が普及する中、電子メールやチャットなどによる些細な誤解からのトラブルや、生徒が開設した掲示板やブログへの誹謗中傷など、生徒を取り巻く状況は複雑になっています。そこで、授業を通して、インターネットへの書き込みがもつ意味や、人間関係に与える影響、今後ICT社会に生きていく上での心構えなどを考えさせたいと思います。どのような授業が効果的でしょうか。

手だて

情報の時間などに、掲示板への不適切な書き込みについて、役割を決めて簡単な演技を行うとよいでしょう。内容は、生徒Aが開設した掲示板に生徒B、Cが匿名で(他の生徒の個人名や学校名を使って)誹謗中傷の書き込みをして、生徒Aは相手が特定できないまま、生徒B、Cだけでなく生徒Dまで疑い、学校で直接生徒Dに抗議して人間関係が悪くなって落ち込んでしまうというものです。画面をスクリーンに映し、他の生徒は保護者や地域住民の立場で掲示板を観察して、感想をメモすると効果的です。

続いて、ホームルーム委員が生徒A～Dや保護者や、地域住民の立場の生徒にどのような気持ちになるかをインタビューし、幾つかのグループに分かれて生徒Aにこれからどうしたらよいかのアドバイス(相談先、人間関係の修復の仕方、掲示板やブログの留意点など)について意見をまとめた後、各グループの代表が実際に生徒Aにアドバイスをします。最後に教員が、情報モラル全般についてまとめを行うことも欠かせません。

指導上の留意点

- 全体の進行はホームルーム役員が務め、事前に演技の内容やインタビューまで含めたシナリオの打合せを十分に行って、可能な限り生徒中心に実施する。
- インターネットでは、相手の表情が見えず、文章表現等による些細な行き違いにより、相手の名誉を著しく傷つける可能性があることを理解させる。
- 教員のまとめの中で、場合によっては名誉毀損や侮辱罪など、犯罪となることを知らせる。

<参考資料>

- 「問題行動等対応マニュアル」(平成20年1月版、山口県教育委員会)
- 「『情報モラル』指導実践キックオフガイド」(平成19年6月、文部科学省委託事業)

主体的に主題に取り組む（高等学校・工業）

場 面

工業高校第3学年の課題研究の時間、ロボット製作のため8人の生徒が集まりました。集まった生徒の中には、興味は示すものの、人に言われるまでは動こうとしない生徒が数人いました。これまでの工業実習の時間には、何をやってみたいかを生徒に問いかけるなどして動機付けを行ってきたものの、これを機会に今一度、目的意識を再確認する必要性を感じました。そこで、生徒自身が「学習計画」を立て、全員が一人一役を担ってはじめて目的のロボットが完成することに気付かせ、「主体的に協力する力」を育みたいと思います。どのようにすればよいでしょうか。

手だて

生徒の課題研究への取組は初めてなので、まず、先輩の研究例を数例見せ、課題研究の内容・手順・日程等を理解させた上で、ものづくりについて十分説明することが重要です。

続いて、全員が主体的に取り組むために、生徒自らが「学習計画」を立案させます。計画には、ロボット製作に関する各担当の決め方や、3学期の発表会に向けての学期ごとの細かな学習内容及び進行管理の仕方を盛り込むとよいでしょう。

主体的に取り組めるかどうかは、担当をどのようにして決めるかにかかっています。適材適所の視点から、ロボットの機構に興味のある者、制御回路に興味のある者、プログラムに興味のある者等、生徒同士がよく話し合っ、納得しながら決めるようにすると効果的です。

指導上の留意点

- 課題研究のテーマに対する動機付けを十分に行う。
- 生徒の得意分野に配慮するとともに、役割分担を明確にし、責任をもたせる。
- 生徒に学期ごとの「学習計画」を作成させ、各班の到達度を明確にする。
- 毎時の作業内容、反省等をノートにまとめさせ、進行管理をする。
- 常に安全に対する認識をもち、互いに安全を確認しながら作業を進めさせる。
- 作業中に起きた問題や課題を全員で考え、協力して創意工夫を加えるようにする。
- 発表は、一人一役で、全員が協力して行う。

個に応じた計算（小学校・低学年）

場 面

通常の学級の1年生で、文字の読み書きの学習はスムーズに進んでいますが、それに比べて、数の理解や計算がなかなか習得できません。このままでは、算数が苦手になってしまいそうです。どのように指導すればよいのでしょうか。

手だて

1 指導の方針

本児は、数をイメージ化することが苦手なようなので、具体物と数を結びつけることを指導の基盤におくとよいでしょう。また、計算は困難が予想されますので、通常の学級での算数の指導の中で、個別の対応として、指や具体物を利用して指導を進めるとよいでしょう。

2 指導の展開

(1) (半)具体物—数唱—数字—指を結びつける指導

算数の教科書を使い、絵や数ブロックを数えながら指を出させます。数字の指導でも同様に指を使い、数唱—指—数字の結びつきを強化します。

同時に、数唱を1から、5から、途中の数からと練習し、次の段階では引き算に備えて逆唱の練習も行います。

(2) 指を使った足し算

- ・ 2 + 3 の計算では、それぞれの数を指で出し、両方の指を合わせて数えます。
- ・ 初めの数を覚え、後の数を指で出し、覚えた数に続けて指を数えていきます。逆に、最初に指を出し、後の数を言って、それに指を数え足す方法もあります。
- ・ 慣れてくると、数の大きい方を覚え、少ない方を指に置くようにします。また、10まで数えたら、それ以上は残った指を見るだけで答えられるようにします。

(3) 家庭との連携

- ・ 保護者の理解も得て、宿題など家庭でも同じ方法を使うとよいでしょう。

3 変化の様子

同様の事例では、算数の時間に、一人だけ別の方法を使うことへの心配もありましたが、繰り返しによって習熟し、順調に課題をこなすことができ、「算数が得意」と言うまでになりました。また、学習に対する自信が増したため、他の学習にも前向きに取り組めるようになりました。

指導上の留意点

- 指は10進法の成り立ちの基となったものなので、計算の補助手段として使うのに便利である。念頭操作が難しい子どもには、指の使用も選択に入れてよい。
- 「できる」という手応えをもち、繰り返し練習することで数の理解が進み、指を使わない計算への移行が期待できる。
- 指を使う計算と並行して、おはじきや1円玉等を使っての計算も行い、指も具体物も同じ役割を果たすことを理解することで、繰り返し上がりの計算へのスムーズな移行も期待できる。

音読が上達するための工夫（小学校・中学年）

場 面

通常の学級の3年生で、会話はスムーズにできますが、音読が苦手です。初めて読む文章は、1文字ずつ読むのでたどたどしく、単語も途中で切っ
てしまいます。行をとばしたり、同じ行を繰り返し読んだりすることもあり、
内容が十分理解できません。教科学習全体への影響も心配です。どう
すればよいのでしょうか。

手だて

1 指導の方針

本児は、会話はスムーズですが、1文字ずつたどたどしく読んだり、行とばしをす
ることなどから、視覚的な情報を正確に把握することが苦手だと推測されます。そこ
で、担任による放課後の支援を週2回各20分程度、家庭では保護者が国語の予習を支
援することによって、読む力の向上をめざすとよいでしょう。

2 指導の展開

(1) 担任や保護者の範読による内容理解

本児は、会話がスムーズなことから、読むのは難しくても、聞けば理解できると
思われます。内容を理解することにより、単語や文節のまとまりをつかみやすくな
るので、最初は教師や保護者が読んで聞かせます。内容に関するクイズを範読後
に出すことで、意欲的に聞くことができます。

(2) 文章を正確に、できるだけ流暢に読む

内容を理解したら、保護者の協力を得て、教科書のすべての漢字に読みがなを振
り、文節ごとにスラッシュを入れておきます。読む箇所を、指でなぞりながら読む
ことを徹底させます。

本児が読み終えたら、何かよいところを見つけ、その都度ほめます。また、授業
中に、自信をもって読める箇所を指名して読ませ、努力や進歩をほめるようにします。

3 変化の様子

同様の事例では、ほめられながら取り組んだことにより、つかえたり間違えたりし
ても、音読には意欲的で、範読を聞いて、自分で読みがなやスラッシュを記入するよ
うになり、徐々にまとまりをもって読めるようになってきました。

書くことについては、保護者と話し合い、通級指導教室やリソースルームでの個別
指導を行うことにしました。

指導上の留意点

- 音読が苦手な背景には、単語や文節のまとまりを瞬時にとらえたり、目で文字
や行をたどったりすることが難しい場合がある。
- 行の境が認識できないときは、一行おきにマーカーで色をつける、読む行だけ
が見える窓付きシートを使用するなどして、見て分かりやすいようにする。
- 様々な方法を考え、どの方法が有効か、実際に指導しながら見つけていく。
- 家庭と協力して、児童が安心して授業に臨めるようにすることも大切である。
- 放課後の支援を行う場合は、家庭や地域等の実情を踏まえ、安全面に留意する。

授業への取りかかりをよくするための工夫（中学校）

場 面

授業を始めようとするとき忘れ物を取りに行くために立ち歩いたり、すぐに私語を始めたりする生徒がいます。そのため、学級全体が授業にスムーズに入れられません。どうすれば授業への取りかかりがよくなりますか。

手だて

1 授業開きの工夫

4月当初に、「チャイムが鳴ったら忘れ物に気付いても、勝手に席を離れてロッカー一等に行かない」ことを学級全体で確認します。それでも、発達障害のある生徒の中には、道具をそろえ忘れる子がいます。特に、入学当初は各教科で指示されることが異なり、とまどいも多くあります。

そこで、慣れるまでは各教科に必要な道具を紙に書いて黒板にはったり、特別な道具が必要となるときには、早めに教室に行って声をかけたりして、チャイムが鳴るまでに道具を机の上にそろえさせるようにします。また、できたときはしっかり称賛することが大切です。

2 授業の導入の工夫

中学校の学習内容は多く、授業も講義と板書中心になりがちなので、5～10分間の活動的な学習を取り入れ、生徒がやる気を失わず、意欲的に取り組めるようにします。

国語では、漢字テスト、詩の音読、フラッシュカードによる重要語句の確認、授業内容に関する○×クイズ、数学では公式の確認や計算練習、社会では歴史クイズや国名しりとり、英語では英単語テストやフラッシュカードで新出英単語の確認を行う等の活動で授業をスタートするとよいでしょう。

3 変化の様子

同様の事例では、年度当初から、必要な物の準備を、繰り返し分かりやすい方法で指導することで、授業に臨む際の心構えを理解するようになりました。また、授業の導入の工夫を継続的に行うことで、どの生徒も授業に参加したという充足感を味わうことができ、取りかかりがスムーズになってきました。

指導上の留意点

- 小学校と中学校の大きな違いの一つに教科担任制がある。各教科の準備物、指示の仕方、提出物の出し方等が異なり、生徒たちも慣れるまでに時間を必要とする。
- 発達障害のある生徒の中には、新しい環境が苦手な場合もあり、混乱することも多いようである。教師がそのことを念頭に置いて授業に臨めば、一つ一つの声かけも、きめ細かなものとなり、支援につながる。
- 授業内容をだまかに知らせたり学習規律をはっきり伝えたりすることで、見通しがもてるようになり、混乱が少なくなる。また、活動的な学習を取り入れると、生徒は何をすればよいのかが分かり、集中しやすくなる。

LDの児童生徒への指導上の配慮

【事例1】プリントに取り掛かることが難しい児童生徒への配慮

解けるはずのプリントにも取り組めない、あるいは家庭でなかなか宿題に取りつかれない場合、一見して「こんなに多いとできない」と感じてしまうことから、量的な調整をすることで無理なく取り組めるようになる児童生徒がいる。課題に対して何らかの苦手意識をもつ場合、最後までやり遂げるのに要する労力の大きさに、気持ちが萎えてしまうのも無理はない。

そのような児童生徒の場合、全部を一度に示さず、部分的に取り組ませ、達成する度に認め、評価し、結果的に最後まで仕上げさせる。しかし、最初から全部できることをねらうのではなく、少しでも取り組めたことを認めていくようにしたい。

【事例2】板書のノートテイクが苦手な児童生徒への配慮

形を正確に捉えたり記憶したりすることが難しい、目と手を協応させることが難しいなどにより、板書をノートに書かなかったり、書くことに精一杯で授業内容を聞く余裕がなかったりする場合、書く作業を軽減して、授業への参加を促すようにする。

- ① 鉛筆や消しゴムなどは、家庭に連絡して使いやすいものを用意してもらう。
- ② マス目の大きいノートや用紙を使用させる。
- ③ 板書はなるべく大きな字で書く。新出漢字は、特別に大きな字を書く。
- ④ 授業では、なるべくワークシートを使う。ワークシートがない場合は、特に重要な部分を囲って、そこだけを視写すればよいことにする。
- ⑤ 書く文字や文を声に出して読みながら書かせ、記憶する際の手助けにする。
- ⑥ 形の記憶が困難な場合は、視線の移動を少なくするために、板書計画のコピーや隣の児童生徒のノートを見て（事前に協力を依頼する）書くようにさせる。
- ⑦ 運動面での問題が影響している場合は、表現する意欲を失わせないように、パソコンや電子辞書等の使用を検討する。

【事例3】コンパスや分度器がうまく使えない児童生徒への配慮

- ① 扱いやすい道具を選ぶ。コンパスはねじがゆるまないもの、分度器は線が端まで引いてあって角度が測りやすいものがよい。
- ② 道具を工夫する。コンパスはつまみの部分にゴムを巻いて滑りにくくしたり、コルクをはめて回しやすくしたりする。また、厚紙か画用紙を下に敷くと針がしっかりと刺さり、扱いやすくなる。分度器を扱う時は読みとる前にずれていないかを再度確認させることで正確に読みとれるようになる。
- ③ ひどく不器用な場合、厳密さを求めるには限界がある。大まかな特徴をつかんでいれば正解や準正解にする等の配慮も必要である。

ADHDの児童生徒への指導上の配慮

【事例1】話を最後まで聞かずに行動する児童生徒への配慮

説明や指示を最後まで聞かず、「分かった」とすぐに行動に移ってしまう児童生徒がいる。普段の会話でも、幾つかの単語に反応して誤解することも多い。

そこで、以下のように配慮する。そうすれば、他の児童生徒も落ち着いて話を聞くようになることが期待できる。

- ① 「今から〇〇について話します。話が終わってから〇〇しましょう」と伝え、最後まで聞いてから行動を開始するように意識付ける。
- ② 「〇〇について、三つ話します。一つは…、二つ目は…（指を折ったり、黒板の印を示したりして）」と到達点を明確にする。
- ③ 一つ一つの文を短く区切り、それを接続詞でつなぐ話し方をする。（「〇〇です」「だから〇〇します」「それでは〇〇しましょう」）
- ④ 高学年では、話を聞きながらメモを取ることを練習する。

【事例2】授業中に立ち歩いたり、外に出たりする児童生徒への配慮

席を離れることが多く、注意すれば席に戻るが、すぐまた離れてしまう。原因としては、目や耳に入る刺激の影響を受けやすい、指示の内容を理解していない、集中できる時間が短いなどが考えられる。以下のような配慮をして、着席していることができた場合には、それをきちんと評価することが大切である。

- ① 座席を廊下側の一番前にする。廊下側の窓は磨りガラスにする。
- ② 教室前面の掲示物はできるだけ精選する。やむを得ない場合は、黒板の周囲を隠せるように、カーテンを取り付ける。
- ③ 全体への指示は自分に対するものではないと思っている場合があるので、全体に言った後、必ず個別の指示を組み合わせる。
- ④ 指示が理解できていない場合があるので、指示をできるだけ具体的にする。
- ⑤ 集中できる時間が短いので、授業をモジュール化して活動を切り替える。
- ⑥ 動き出しそうなときに、プリントを配る、メモを職員室に届ける等の仕事を与える。

【事例3】忘れ物が多く、物の管理が苦手な児童生徒への配慮

忘れ物を減らすためにメモを取ることはよく指導されている。しかし、発達障害の児童生徒は書いたメモをなくすことも多い。そこで、次のような支援が考えられる。

- ① 書いたメモを一定の場所に保管させる（連絡帳にはる等）。
- ② 配布物等も連絡帳に挟むか、決まった連絡袋に必ず入れさせるようにする。習慣になるまでに時間を要するが、家庭と協力しながら定着させたい。
- ③ 提出物も保管場所を一定のところに決めて置かせる。出ない場合は個別に声をかけたり、途中経過を確認したりして注意を持続させるとよい。

高機能自閉症の児童生徒への指導上の配慮

【事例1】グループ学習に参加することが苦手な児童生徒への配慮

グループ活動への参加が苦手な児童生徒には、発言はできるが、聞くことが苦手な場合が多い。また、待つことが苦手だったり、グループ内での活動の流れについていけなかったりする児童生徒もいる。

このような児童生徒にとって、友だちの意見を聞きながら、自分の考えをまとめたり行動を調整したりすることは、非常に難しい面があることを理解する必要がある。

そして、児童生徒だけで進める学習を設定する際には、グループ編成に配慮する。参加を無理強いせず、「焦らず、無視せず」という対応のできるリーダーが望ましい。

また、ワークシートなどで、「何をするのか」「どうやってするのか」など、活動内容や手順を分かりやすく示すことも重要である。

【事例2】感覚が過敏で大きな音を怖がる児童生徒への配慮

音に敏感で、大きな音がすると耳をふさいだり、怖がって泣き出したりする児童生徒に対しては、非常につらい思いをしていることを理解して対応する。がまんを無理強いしないことが大切である。

- ① その児童生徒がどんな場面で、どんな音を嫌がるかを把握する。
- ② 代用できる音や方法を見つける。(運動会のピストル→笛の音、旗の合図)
- ③ 嫌な音を避けられない場合は別の場所へ移動させたり、耳栓を使用させたりする。
- ④ 周囲の児童生徒が、音を怖がる児童生徒のことを理解せず、わがままだと非難する場合は、自分にも嫌な音や耐えられない音があることを想起させ、共感できるように説明し、理解を促す。
- ⑤ 家庭生活では、ヘッドフォンを使用することも有効である。

【事例3】流れを無視して発言してしまう児童生徒への配慮

教師が話している途中でも、自分の興味がある話題になると口を開いてしまう児童生徒は、状況の読み取りが難しいことが多いので、言動のコントロールを図るために、場面理解カードを作成して指導するとよい。例えば、不必要な発言があったとき、耳の絵カードを提示し、「今は聞く。質問は後。」と伝える。そのあと、約束どおり質問の時間を設けて対応する。

その他、注目させたいときは目の絵カード、静かにするときには口を閉じた絵カード、書かなければならないときは「書きます」と書いた文字カード、手を挙げて発言しなければならぬときは挙手の絵カード等も作成しておき、必要に応じて使用する。そうすれば、視覚情報が優位な生徒は、今どうしなければいけないのかがよく分かり、流れを理解しない発言が少なくなる。理解できれば、身振りやジェスチャーでもよい。